

第3回 タニシ



河北潟周辺の田んぼや農水路には、マルタニシとヒメタニシという2種類のタニシが生息しています。マルタニシは成貝では通常は40mmくらいの大きさになり、殻の周辺は丸みを帯びています。冬でも適当に湿っている水田や農業用の土水路などに生息します。ヒメタニシは、通常20～30mmくらいですが、河北潟ではもっと大きくなるものもいます。殻の角が角張っていて、小さいときはそろばん形ですが、成長すると太めの角のようになります。多様な環境に生息し、コンクリートで護岸した水路や水質があまり良くないところにも棲んでいます。

現在、河北潟地域でみられるタニシのほとんどはヒメタニシで、マルタニシはあまりみられません。最近の調査(野村・高橋, 2006)では、ヒメタニシが確認された地点が32地点であったのに対して、マルタニシは5か所だけでした。マルタニシは、環境省の準絶滅危惧種となっていますが、河北潟でもかつては普通にみられたものが、圃場整備や水質悪化に伴って、ほとんど生息しなくなっているようです。

昔、河北潟の潟縁に暮らす人たちは、タニシを大豆と一緒に煮たりして食べていたようです。農文協が「聞き書き石川の食事」という本を出版しておりますが、河北潟潟端地区の食事の紹介として、「潟周辺の田んぼでは、稲刈りの終わったあとに、たにしがごろごろとこころがっている。大きな竹かごいっぱいもひろうことがある。春先にも、雪が解けて田の水が温かくなると、たにしが顔を出す。こうして、春と秋の二度、たにしを食べることができる」と書かれています。また、潟端在住の坂野巖さん(77歳)によると、「タニシはフゴとよばれるぬかるんだ田んぼでたくさんとれた。まるくて大きくなるタニシで、田んぼには大きいものも小さいものもいたが、食べ応えがある大きいものを選んでとっていた。水路には色の違う小さなタニシがいたが、そのタニシはあまり見

かけなかったし、食べなかった。」ということです。ご本人に図鑑で確認いただきましたが、田んぼにいて食べられていたのは、マルタニシで間違いなさそうです。

昔とくらべて、マルタニシは著しく数が減ったのは明らかです。一方、ヒメタニシは数の増減は不明ですが、環境が変わった中でも、今のところしぶとく生き残っています。もともと中国からもち込まれたものとする説もあるようです。一方、北米に移入されたマルタニシは、各地で繁殖して問題となっているようです(フリー百科事典「ウィキペディア」による)。

(文：高橋 久)